

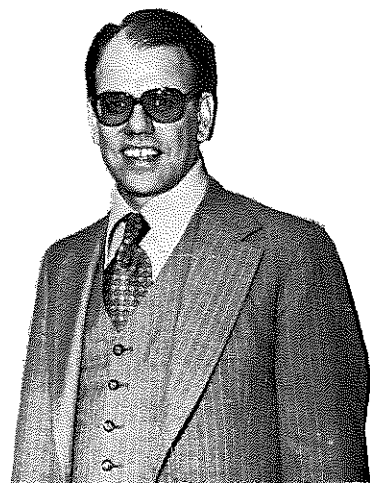
PAUL C. POLLEI 教授来日

ポール

ポレイ

各地で公開講座—参加者に感銘

5月14日から2週間、東音の招きでポール・ポレイ教授がアメリカから来日。東京をはじめ大阪、姫路、静岡、茨城などを訪れ、各地でマスタークラスや個人レッスンを行った。ポレイ氏はこれまで日本の知名度がなかったが、今回の来日で講演をきいた人々は一様に、その人格と教授法のすばらしさに深く感銘をうけたと語り、再来日が強く要望されるなかで5月28日羽田をたち、次の演奏会地ハワイへむかった。



ポレイ氏はアメリカユタ州のブリガムヤング大学の音楽理論、ピアノ専攻の名誉教授であり、アメリカ各地やヨーロッパ、カナダの大学で教えるかたわら、定期演奏会を開催するなど幅広い活動を続けている。著作「ピアノ指導の奥義」をはじめ雑誌などにも寄稿。今回の来日あたっては「全日本ピアノ指導者協会の福田靖子女士を訪問」と題してアメリカの新聞でも報道された。

合衆国音楽指導者協会・ユタ州の副会長でもあるポレイ氏は故ヨルダノヴィク女士の遺志をうけつぎ、姉妹関係にもある日本とアメリカの協会の交流の発展のためにも努力したいと語った。氏はブリガムヤング大学において毎年音楽フェスティバルを主催しているがそこで催さ

れる国際コンクールに、日本でのコンクールの優勝者を招待することを約束した。

おりからハワイで開かれているコンベンション（全米ピアノ指導者協会の北西、南西部地域が主催、代表はドレスケル女士）においてポレイ氏はコンサートで演奏することになっており、福田氏からドレスケル女士にあてた手紙をたずさえて日本をはなれた。

DR. POLLEI SCHEDULE IN JAPAN

5月		21(土)	会員の池田先生宅においてプライベート・レッスン。
14(土)	ポレイ氏来日	22(日)	茨城県竜ヶ崎を訪れる。竜ヶ崎支部主催のマスタークラス。
15(日)	東京築鴨において公開講座	23(月)	京都観光
16(月)	東京スガナミ楽器において公開講座、内野先生(桐朋音楽学校講師)宅でプライベート・レッスン	24(火)	大阪三木楽器においてレクチャー・リサイタル。夜、伊奈和子宅で歓談。
17(火)	ピアノ練習	25(水)	姫路支部で公開講座、姫路見学
18(水)	田村宏学芸大教授宅を訪問、桐朋大学を訪ね三善晃学長、大島正泰、林秀光両先生にあいさつ、歓談、夕刻プライベートレッスン	26(木)	日本楽器浜松工場見学、静岡県焼津支部で公開講座
19(木)	東京江古田末日聖徒キリスト教会でコンサート	26(金)	東京調布支部でレクチャー。鈴木公江先生宅で創作指導見学。
20(金)	スズキ才能教育を見学。全音楽譜出版社、芸術現代社、音楽之友社、各社訪問。夜小林仁コンチェルトの夕べをきく	28(土)	銀座でショッピングを楽しむ。福田氏の家族と夕食のち帰国

Letters from students

聴講者からのたより

「エリーゼの為に」はアメリカの
子供にもあこがれの曲

——ポレイ先生をむかえて——

藤原 亜津子 (竜ヶ崎支部)

連日の workshop にもめげず、5月22日(日)に竜ヶ崎へおい出下さったポレイ先生は、約5時間に及ぶレッスンを実に見事な御指導で参加者40名(生徒達)(レッスン受講者内9名)に、深い感銘を与えてくださいました。ポレイ先生のお人柄が気どらず、大変明かるく、レッスンでのお話が解りやすくてどの生徒にも理解できた事が、大変有意義でした。受講曲日と演奏者の年令は

ドビュッシー	アラベスク第一番	20才
ベートーヴェン	エリーゼのために	6才
〃	ソナタ3番 Cdur 第一楽章	18才
〃	〃 5 〃 Cmoll 〃	18才
〃	〃 16 〃 Gdur 〃	17才
〃	〃 17 〃 テンペスト 〃	17才
〃	〃 20 〃 Gdur 〃	16才
パッ	ハインベンション8声より8番12才	
リス	トエチュード op. 1 のNo 9	18才

今迄に数回公開レッスンを試みてきましたが、いつも收穫大なるものがあります。それは、私自身の勉強になることはいう迄ありませんが、生徒達が他の先生のレッスンを受けることによって先生の人間性や考え方にふれ、表現法、演奏法が色々あることを知ることが出来ること。その後の勉強態度が意欲的になり、演奏内容が以前より豊かになること。私と生徒の間には長い間に起る慣れ合い的なレッスンの雰囲気があるのですが、他の先生のレッスンということの新鮮さや、緊張感が生徒により体験になること。メリットをあげたらまだまだありますが、私も生徒も共に勉強していこうという意欲がわくことが、何よりうれしいことです。

最後にポレイ先生の素晴らしい演奏をきかせていただき感激しました。又生徒の「エリーゼのために」は日本では私達のあこがれの曲ですが、アメリカの子供はどうですか?という可愛い質問にポレイ先生は「アメリカの子供達も同じですよ」とニコリされてなごやかに閉会となりました。



——公開レッスンを聴講して——

渡利 由子 (8才) (竜ヶ崎支部)

ポレイ先生のレッスンは大変感動して、その夜はあまりねむれませんでした。月曜日も、ポレイ先生のことばかりうかんでくるのです。5時間あまり、あんなにピアノを長くきいたのは、はじめてです。

ポレイ先生はとてもきびしくて、うけた人は大変だろうなあと思います。オーバーにそれを表現させます。私がうけたらそれこそもうダウンになってしまうんじゃないかなと思います。でも受けてみたい様な気持ちもします。私はポレイ先生のレッスンをきいて今でも忘れられない、それ程感動したのです。

村瀬 薫 (14才) (竜ヶ崎支部)

公開レッスンを聴講して2週間もたったのに未だあの時の感動がさめません。それは私だけではないと思います。皆が強い感動を受けたに違いないと思います。ポレイ先生は表現がとても大きく、英語があまり分らない私達でもよくわかり、とても楽しく受けられました。やさしさの中にきびしさがあり、初対面と思えない親しみがありません。

5時間という長い間がとても短かく感じ、誰もが、私もレッスンを受けてみたい!と思ったに違ありません。私はこのような公開レッスンを聴講できる環境にいることをとても幸福に思います。又公開レッスンを企画して下さった藤原先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

川野 典子 (池田先生門下生)

小さい人たちにも両方のペダルを使って弾くのはびっくりしました。でもそれが大変良い曲想となり喜んでます。実際に弾いて下さるのでよく理解でき身につくような気がしました。

ふつう外国の先生は時間がくると終わらなくてもレッスンを中止してしまうと聞いていましたが、ポレイ先生は時間にこだわらず長い時間熱心に見て下さいました。曲の中でスーパーレガートやボリュームのある音の大切さやタイミングなどよくわかりました。これからももっと勉強して機会があったらぜひポレイ先生に見ていただきたいです。

=Work Shop=

BEETHOVEN'S PATHETIQUE MOONLIGHT SONATA

「悲愴」「月光」 の指導のために

—5月15日 ポレイ氏公開講座—



5月15日、巣鴨さんとろべにおいてポール・ポレイ氏の公開講座が開かれました。午前中にベートーヴェン、午後にはドヴィッシィの各曲をとりあげられました。楽譜のすみずみにわたって細かい表現と合理的なテクニックを豊かな音楽的知識と経験をもって話され、聴講者を魅了しました。

ここでは午前中のベートーヴェン「悲愴」と「月光」の一部をとりあげて紹介します。なお当日の録音テープは東音で借りることができます。

ピアノソナタ OP 13 「悲愴」

ベートーヴェンのピアノ作品を弾く際に大切な事は、その奏法について、彼の楽譜に忠実に弾かなければならないことです。バッハは、その弾き方については、何の要求もしていません。しかしベートーヴェンの作品に対しては、『神様に対するように頭を下げて』そのタッチ、フレーズ、ダイナミクス、強弱など正確に演奏しなければならないのです。彼の作品の構成は、非常に壮大で高度な内容を持っていますから他の作曲家よりたくさんのお話を要求されます。

【I 楽章】

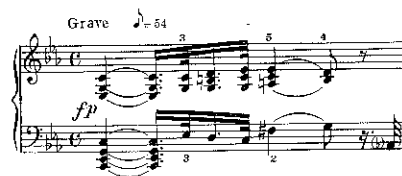
まず最初に、和音が連続して出て来ているので、コードをつかませる練習をさせましょう。あるコンクールで女の子が、誤まったコードで弾いているのを聞いたことがあります。耳慣れる事が重要ですから、長短増減の和音のコードをしっかりとつかみ取って練習することが必要です。

次に *ff*, *fp*, *sf* の記号が見られますが、これはベートーヴェンの性格を表わしていると考えられます。白黒をはっきりつけて下さい。強い音を弾く場合の4、5の弱い指を補うために、私は子供のおもちゃで指の訓練をしています。先ほどのコードの練習も指の訓練になり

ます。また、効果的な指使いは、楽譜通りにただ弾くのではなく、自分で考えて弾き易いよう変える事ですね。

(第1小節)

Grave の指示で始まっているので、できるだけゆっくりシリアスに弾いて下さい。*f* → *p* へのパイプレーションはペダルと手首を使い、次の音を弾く前にすでに *p* にしてしまう奏法を用います。ふたたび、ほんの軽くただたくだけで、途中のパイプレーションは消えてしまいます。*sf* の記号の箇所は、ペダルを充分生かして部屋全体に充満させるように響かせるとよいでしょう。



(第5小節)

p → *ff* つまり白→黒へと耳を慣らすには、これもペダル効果的に使うことです。前の小節につられて、決して速くならないで下さい。*Grave* の指示を守り続けることは、後の速い楽章をより効果的にする為でもあるのです。そして *p* → *ff* の間は、少し待つことです。そしてハイドン、モーツァルト、シューベルトの曲にもよく見られますが、長い音符に「よりかかるように弾く」ことは、連続和音の出てくるこの内容にかなっていません。



